



【小学校中学年の部】

読んだ本…空にむかつてともだち宣言
著者…茂木 ちあき

友達の大切さ

蓬田小学校4年 吉田 華菜さん



私には、仲のよい友達がいっぱいいます。遊んだり、勉強したりして楽しく生活しています。しかし、とき

どきけんかをしてしまうこともあります。そのたびに、「友達を大切にしないくちや」と思うことが四年生になって多くありました。そんな時、夏休みに読む本を何にしようかと本屋さんに行つて初めに目にとまったのが「空にむかつてともだち宣言」でした。表紙には、二人の女の子が目と目を合わせながら手をつないで、楽しそうにスキップをしているような絵がかいてありました。そして、題名は「ともだち宣言」と書いてあり、いっしょに読んで「これにきめた。はやく読みたい。」と思い、本を買いました。

この本は、母親と二人ぐらしの小学四年生のあいのりの家となりに、ミャンマーからひなんしてきた、あいのりと同じ年のナーミンが中心のお話です。

ナーミンは、転校して来てすぐに調子に乗っている男の子から、「難民だからナーミンなんだろ。」と言われ、給食をもらえないいやがらせをうけました。私は、「なんてひどい男の子達だ。ナーミンがかわいそう」と思いながら読んでみると、あいのりが男の子達を怒つて、一人の男の子のいすをけつとばしました。その時私は自分のことをふと考えました。

【小学校高学年の部】

読んだ本…モモ
著者…ミヒヤエル・エンデ

時間とはなんだろう

小平小学校6年 会田 玲那さん



私はよく、時間の使い方が下手だと言われます。私も、その事を少し自覚していました。が、時間の使い方

は人それぞれなのだから口を出さなくても良いのではないかと思っていました。時間があふるのは当たり前という私の考えを本にそうなのかと問いかけてくれたのがこの本「モモ」でした。

円形劇場あとには、小さな女の子、モモが住んでいます。モモは時間をつかさどる「マイスター・ホラ」と出会い、時間とはなにかを考えます。私もモモといっしょに考えました。人はみんな時間をもっているけれど、時間は目に見えないし、触れもしない。こうやって考えると時間って不思議なものだなあと感じました。しばらく考えてみて、私はひらめきました。時間とは、生きているということなのではないでしょうか。生きているからこそ時間があり、時間があるからこそ生きていることができる。そう考えました。そして、モモは本の中で「時間は一種の音楽なのよ。」と言いました。いつでもひびいている静かな音楽が人の心の中にあるとモモは考えています。それはどんな音楽なのだろう。私も聞いてみたい。そう思いました。私とモモの考えはちがうけれど、どこことなく似ている気がしました。

【中学校の部】

読んだ本…星の王子さま
著者…サン・テグジュペリ

「星の王子さま」を読んで

ひらた清風中学校3年 春日 彩花さん



「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばん大切なことは、目に見えない。」
私は、この物語から、人とかかわりの中で大切なことを学んだ。

中で井戸を探し出した時、「僕」はこう思った。「それは、まるで祝祭の喜びのように、心にしみる水だった。星空の下を歩き、滑車の歌を聞き、僕が力仕事をして得た水だ。だからこそ、それは贈り物にも似た、心にいい水なのだ。」と。私はこのことから、「大切なもの」には、それに関わる経験や思い出があるはずで、それらがそのものを特別にさせているのだと思った。私にとっての大切なものもそう。私が大切にしているものに、小学校の運動会で一位から三位に入賞した時にもらえるバッジがある。傍から見れば、なぜそんなものが大切なんだと思うかもしれない。しかし、私は今でも、全てのバッジを捨てられずに、そつと箱に入れてしまったままにしている。そのバッジを見ると当時の自分の姿が生きた心の中に蘇ってくるのだ。スタート前の緊張感や少し冷たい風の感じ、声援やアナウンスの声、そしてゴールした時の嬉しさや感動……。一つ一つがかけがえのない思い出として、バツジに刻まれていく。こういった思い出が、「目には見えない大切なこと」なのだろう。

そして、私が最も印象に残ったのは、王子さまと、王子さまの星に咲くバラとの絆だ。

王子さまとバラは一見、あまり良い関係には見えない。バラは自己中心的で王子さまを困らせるし、王子さまはそれのせいでバラのことを信用できなくなっていく。それで王子さまはバラと向き合うことから逃げ、星を出ていつてしまったのだ。

しかし、王子さまはやがて、そのバラが自分にとってたった一本のバラであったこと、つまり特別な存在であったことに気付く。一匹のキツネが気付かせてくれたのだ。キツネは王子さまに、

「きみのバラをかけがえのないものにしたのは、きみが、バラ



「悪いことは悪いと言えているかな。だめだと分かっているけど、友達のことを仲間はずれにすることあったな」と思いました。だから、あいのりのとった行動はいいことだと思えなくても、ナーミンのことをしんげんに考えて守ってあげているからすごいなと思いました。大切な友達だからこそ、言わなければいけないことがあるし、やってはいけないことを友達がしようとしていたら、はつきりと言葉にしないといけないと思いました。

トラブルがあった後、担任の先生が、「難民」についてみんなに話をしました。悪いことをしていないのにナーミンのお父さんはろうやにいられて、ぼう力をうけていたから、ミヤンマーにいたくてもいれなくなってしまう。日本にひなんしていることが分かりました。私は、原発問題で福島からひなんしている人がいじめをうけていたというニュースを思い出しました。だから、どんな人にもやさしく話さなければいけないと思いました。

先生が難民について話した後、ナーミンの国でおどられている「バガンダンス」を学習発表会でおどることになりました。男の子達ともダンスをしているうちになかよくなりました。本当に良かったと思います。

私も友達も、一人一人せいかくが違います。だから、友達と話が合うこともあるし、合わないこともあります。この本を読んで本気で考えたことは、どんな時にも、友達の気持ちを考えて話しかけたり、行動したりすることが大切なんだと思いました。そして、大切な友達だからこそ、どんな時にもしんげんに話ができるすてきな関係をつくっていかねばと思います。みんな、よろしくね。

モモがマイスター・ホラのところに行っている間、モモの友達に「時間どうぼう」の男たちがせまっていた。モモが帰ってみると円形劇場のあとにはだれもいませんでした。「時間どうぼう」の男たちによってモモのところにいく時間がなくなっていました。私はとても泣きたくなくなりました。いつもいっしょにいてくれた人がある時こつぜんと来なくなってしまう。孤独という言葉が頭を横切りぞつとしました。さびしさと同時に何かおそろしいものを感じました。時間がなくなり一人になってしまうということがとてもおそろしいことだと分かりました。

この本を読んで私は、時間があるということがどれほど貴重なことか分かりました。「時間がなくなる」なんて考えたこともありませんでしたが、この本を読んだから考えるとおそろしいことだと気づきました。この本の中に「人はなにをするにも、必要なだけ、そして好きなだけの時間を使える」という文があります。そんなことは当たり前だと思っていました。が、もしかしたらこれは、とてもすばらしいことなのかもしれません。今、この瞬間も時間は一秒一秒と過ぎていきます。時間は目に見えないけれど、私たちは時間と向き合いつながり生きています。時間が過ぎていくのをただただ待っている、いけないのです。時間があるということはすばらしいことなのです。ですから、それをしっかりと感じながら、一秒一秒を大切に過ごしていきたいと思っています。

私達が時間を取り上げられることはないけれど、この本を通して学んだことを忘れないでいたいと思います。時間の大切さを教えてくれて、ありがとうモモ。

のために費やした時間だったんだ。」と教えた。王子さまのバラの姿は、他の何千本とあるバラと変わらないうし、数ある中のただの一本にすぎない。しかしあのバラは王子さまが咲くのを楽しみに待ち、そして育てた「たった」一本のバラなのだ。また、水をあげたり、ガラスのおおいをかけてあげたりもしたし、毛虫やついたてで風からも守ってあげた。こういった、一本のバラに対して費やす時間や、愛おしく思う時間、一緒に過ごす時間が、互いをかけがえのない存在にし、「二人の間に「絆」をつくるのだらう。これらの「時間」や「絆」も、やはり目には見えない。しかし、大切にしなければいけないことだと思ふ。

さらに王子さまはバラについて、こんなことを言っていた。「どこかの星に咲いている一輪の花を愛していたら、夜空を見上げるのは、心のなごむことだよ。星という星全部に、花が咲いているように見える」と。私はこの言葉で、自分の大切なものを「愛する」ということは何なのか、二つのことを知った。

一つは、「愛するものに関わる全てが自分にとって愛しく感じるようになる」ということ。少し難しいが、例えばその人が好きな音楽を、自分も好きになるというのは私にも理解できる。それと同じことで、王子さまも愛するバラのいる星を愛しく思ったのだと思う。

もう一つは、「そのものは見えなくても、心に浮かべることで幸せになる」ということだ。王子さまは「星空を眺めて、その星のどこかにバラがいると思うと、幸せになる。」と言っていた。たとえ相手のことが目には見えなくても、その人を思い出した、考えたりすることで、心の中でその人に会えるということだと思ふ。キツネの言っていた「心で見ると」というのは、こういうことなのだろう。また、キツネは王子さまに「金色に輝く小麦を見ただけで、ぼくはきみを思い出す。」と言った。王子さまの髪は小麦と同じ金色だ。まるで連想ゲームのようだが、色で相手を連想するのも、心で見ることの一つだと思ふ。だからきつと王子さまも、夕焼けに染まる空を見て、美しいあの花を思い出すだろう。

「大切なことは、目には見えない。」思い出や絆、愛情は、どれも目には見えない。だからこそ、私達は、「心で」見る必要がある。王子さまは自分の星へ戻ってしまっただけで、「僕」はきつと、心の中に王子さまを思い浮かべ、星空を眺めて、星々の笑い声を聞いたと思う。私は将来、様々な人に出会い、また多くの思い出をつくり、別れも訪れるだろう。しかし、どんな時も「心で」物事を見つめていきたい。目では見えないものが見えてくるはずだから。